

「佐田岬半島の初盆行事」の現在

佐田岬半島ミュージアム

館長兼 主任学芸員

高嶋 賢二



佐田岬半島のお盆

愛媛県の西端—佐田岬半島では、毎年夏のお盆になると人口が増える。県外ナンバーの車が増え、見慣れない子どもたちの声が弾む。帰省した家族がそろったところで、各地区で個性的な民俗行事がおこなわれてきたのだ。例えば、宇和海に面した伊方町川之浜の例を紹介しよう。

川之浜では、8月15日の朝、その年に新盆を迎える家族と地区の有志で、麦わらを使った全長4〜5メートルに及ぶ大きなオシヨロブネを作る。夕方そのオシヨロブネを海辺に運ぶと、新盆の家の人が故人に見立てた市松人形を掲げた竹を持ってきてフネに突き立てる。人形は白装束をまとい、男だった

ら白鉢巻、女だったら白手拭いを姉さん被りにして、肩に掛けるサンヤブクロに故人の好きだったもの（煙草など）を入れ、背中には弘法大師の描かれた小さな巻物を背負う。

やがて砂浜に線香を立てて人々が手を合わせ見守る中で、漁船に載せてオシヨロブネが静かに沖へと流される。

同様に数メートル級の菓子のフネを作って流す行事は、大久地区や大江地区など瀬戸地域（旧瀬戸町域）で多く見られる。ただ大久では大きな帆船仕立て、大江で



大久のオシヨロブネ



川之浜のオシヨロブネ

は万国旗をはためかす漁船のようで、各地区ともフネの形に個性が出ていた。

こうした行事は写真家・新田好（1922〜2016）が被写体として注目し、『三崎半島地域民俗資料調査報告書』（愛媛県教育委員会、1971）や守屋毅『愛媛の祭りと民俗』（雄山閣、1978）などにも取り上げられて、徐々に愛媛県内の特徴的な盆行事のひとつとして認知されてきた。

国の記録選択文化財に

オシヨロブネにとどまらず、佐田岬半島地域のお盆行事を広域に調査を進めたのは故・近藤直也九州工業大学教授（当時）だった。筆者も2002年に伊方町就職直後頃から、近藤氏に誘われて毎年のように盆行事の調査で各地区を駆け巡り、各地の行事に圧倒された。

例えば、松地区のモウナでは、大きな笹竹に女性の着物を掛けて、頭を付け、横木で手を広げた形に作って、裾にアワビの貝殻を吊るした等身大の人形を作る。新



松のモウナ

盆の家族を中心
に地域の人々が
集まって人形を
掲げて行列し、
神社の石段とお
寺の境内でそれ
ぞれ人形の竹を
地面に着け、空
に円を描くよう
に回しながら、
太鼓と鉦に合わ
せて「モーナ、
モーナ、モー
ミードーブ」と
声を上げ、その
周囲を人々が巡
る。

ほかに三崎
地域（旧三崎町
域）の本三崎地
区のモウリヨウ
という行事で
は、夕方盆踊り
の櫓周りに新盆
の家族や親族な
どが集まると、
鉦・太鼓の音に
あわせて何の振
り付けもなくた
だ時計回りにぐ
るぐる歩く。そ
の中で区長が
「○○さん（故



豊之浦のヒータキ



大成の盆踊り



三崎のモウリヨウ

人の名前）にあげてください」と呼びかけると、みんなが「はい」と返事をするという行為が延々と繰り返される。名取地区のモウリヨウでは人々が細長い旗を持ってぐるぐる巡るし、明神地区のモーローではぐるぐる巡った後、ササブネと呼ぶ細い葉で折った舟形を海に流し、お墓に行つてネンブツを唱えてお茶を飲む。

伊方地域（旧伊方町域）でも、大成地区では盆踊りに故人の位牌を背負つて踊るし、豊之浦ではヒータキといつて朝4時頃から近所同志で新盆の家を訪ね、縁側に置かれた砂の入ったトロバコに100本の蠟燭を立てる。

さて、こうしたバラエティ豊かな一連の行事の貴重さを鑑み、近藤直也氏の精力的な調査も甲斐あって、ひとまず法的な保護の網を掛ける意味も込め文化庁の石垣悟調査官（当時）実見の上で、2010年、「佐田岬半島の初盆行事」が現伊方町域のすべての盆行事を対象に、国の「記録作成等の処置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。

2014年には文化庁の「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」に選ばれ、桜映画社による記録映像のDVD（記録編・普及篇）が製作された。

当時から町の文化財担当だった筆者としては、これらを機にどうか各地区で伝わる盆行事を、奇を衒うでなく、変容するでもなく、今までどおり堂々と誇りをもって継承してもらいたいとの思いだった。当初は好奇の目に晒されたかもしれない、一時は調査と名乗る横やりに翻弄されたかもしれない個々の行事

は、そのずっと昔からそれぞれの地域で育まれた「普通」、スタンダードな暮らしの仕来りだったはずなのだ。卑下することなく煩瑣を厭わず、故郷のアイデンティティの一助であつてほしい、ひいては故郷を慕い、帰りたいくなる動機をも後押ししまいかとの過大な期待も込めたものであつた。

さまざまな試練の先に

もちろん記録選択なので、まずは報告書作成という課題が現在も継続中だが、他の無形民俗文化財と比べ「佐田岬半島の初盆行事」が幸いだったのは、過度な観光資源化を免れていることと言えるかもしれない。

一方で高齢化や人口減少等の全国各地を襲う諸課題が、ここでも盆行事の存続を脅かしている。そしてコロナの数年間で状況は更に厳しさを増した。川之浜は市松人形をやめてナスを使った人形に転換し、大江のフネは一回り小さくなり、大久は盆行事とも関連する「しゃんしゃん踊り」を中断した。

誤解を恐れず言えば、地区の人間、家族を一人亡くして行われる「初盆行事」は、故人を悼む気持ちの先に実施の原動力が芽生える。コロナ禍の只中、参加者が接近する松のモウナなどは中止を余儀なくされたが、オシロブネは関係者の尽力で継続された。その時は変な話、地域の吊いの作法がコロナに勝てた気がして少し誇らしかった。

どうかこの先、将来も、この稀有な地域の民俗文化が継承されることを切に願っている。